

フォリアドウ

蛸足梅膳 VS しんじ

A (蛸足)

いつも、いつの間にか眠りに落ちる。その瞬間を知らない。それなのに目覚めは。

「あつたーらしいあーさがきた、きつぽーおのあーさーだ、よおろこーびにむねをひーらけ、おおぞーらあつおつげークロエちゃん、おつしごとー」

頭の中にこれが響いてきた。強い抑圧のため普段は意識に上ることがない、頭蓋内リンクが作動しているのだ。

これから話そう、こんなふうになってしまった私達、こんなふうになってしまった世界のことを。

「空の上、交通ルールも、上の空、……じゃだめだよ上の空じゃ。空の上、スピード出しても、何出すな？ 別に、出して悪いものって、排気ガスとか？」

隣の席からの声を黙殺するのは、乗り物酔いの吐き気を堪えるのに似ている。ヘリに酔わなくなったのはだいぶ前だ。眼下には青いペンキを均一に塗ったような海。視線を上げれば、空色のペンキを均一に塗ったような空。

そして前方の、逆さにした漏斗のような物体。すぐ近くに見えるのはあまりにも巨大だからで、海面上では二百キロ先にある。日本の南東海上、鳥島の西二百キロに浮かぶ、メガフ

ロート。兼、軌道エレベーター。日本人の無意識の「夢の島」。

小説にナノマシンを登場させるのは鬼門と言われている。なんでもできてしまうため、物語が破綻しやすい。しかし、現実にナノマシンが普及し、なんでもできるようになってしまったら、私は何を語ろう？

我々は今からあの夢の島に潜入工作に向かう、秘密組織《我ら姉妹^{ノ・ス・レ・ス・妹}》のエージェント。二人で一つの、狂った魂。あるいは狂った科学の、腐った果実。

「右見て左、死亡事故、居眠りよそ見、二段階右折、きんきよりちたいくうみさいる……」

隣にいるのは相棒の鈴木和子。この名前はこいつが自分でつけたハンドルだ。親にもらった名前ではなく。

私は十文字黒衣を名乗る。私達は《二人^{フ・オ・リ・ア・ド}であること^{の病}》と名付けられた戦術リンクシステムで意識をつながれ、近接戦闘と各種工作の鬼となる。

一秒のあいだに何回も、新しくなる感覚。私は相棒のことが大嫌いだ。憎んでいる。一人だけ殺していい、と言われたらこいつを殺す。一番残酷な殺し方を私が考えついたとしたら、頭の中の実験台はこいつだ。名前を意識に昇らせるのすら嫌だ。だから代名詞が多くなる。

「空の上、右と左と、上と下」

こいつの趣味は交通標語づくり。期待に満ちた目でこちらを見つめる。私は反射的に殴りつけようとする右腕を左手で抑える。

「下手糞」

どうしようもなく下手糞だ。もはや何を言っているのかわからない。

「時間です」

斜め向かいに座る技術マネージャが声を出した。私は憎悪を籠めて睨みつける。二番目に殺すのはお前だ。

とはいえ予定は予定、私と相棒は同期シーケンスを開始する。これから二人で同じものを見ながら、頭の中で説明する。二人が同じような知識を持っているものを見ながら。頭の中に相棒の知識が入り込んでくるが、知っていることなので違和感を感じにくい。説明に集中しているあいだに、私達は徐々に同期していく。

今見えるものといえば、海と、ヘリと、夢の島と、同乗している技術マネージャぐらいだ。私達はいつも目的地の夢の島を使う。

上層から順番に。視線を上げる。僅かな違和感があるのは、システムによる介入のせいだ。相棒も同じタイミングで視線

を上げるように、微妙な介入が行われたのだ。

この同期シーケンスを撮影したビデオを見たことがある。

私達自身のものだ。私達は最初同時に視線を上へ上げ、ほとんど同じタイミングで瞬きをし、ほとんど同じように視線を動かす。だんだんと動きが完全に一致するようになり、さらにしばらくすると二つの視線はまた別のものを見るようになる。しかしこれは完全に同期した状態だ。一つの意識が、二つの頭と四つの目を持っているのだ。それは見ていればすぐに分かる。

おぞましいのだ。シヤム双生児の数十倍も。真つ二つにされた人間が何事も無かったように動いていた。人体に一つしか無いはずのものが二つあったら。その実例を私は映像で見てしまった。

あまりの嫌悪感と、それが自分であるという事実には耐えられず、私は錯乱した。ディスプレイを正拳突きで貫き、切れるような後ろ回し（自分で言うのも何だが、大抵のサンドバッグが一発で裂ける）を技術マネージャーに叩きこみ、プロック塀を粉碎する裏拳打ちを相棒に向けて放ったが、あっさりと小手返しに捕られて押さえつけられ胸を揉まれた。このとき相棒をいつか殺すと決心した。そして鎮静剤を打たれるまで喚き続けた。

なんでこんな事をやっているんだろう？

視線を上へ。もつと上へ。

夢の島から、軌道エレベータが空を貫くようにどこまでも伸びている。はるか上空に光の線や点が明滅する。荷電粒子兵器の射線が飛び交っているのだ。成層圏より上はスーパーロボット／シューティング世界となっている。

過去のフィクションに登場した様々な人型機動兵器と宇宙戦闘機がごちゃ混ぜになって戦っている。管理委員会が設置され、プレイヤーは二つの陣営の内どちらかに適当に割り振られ、支給された機体に乗って戦う。

違う設定の違う作品の機体であっても、適当に調整され、共通のルールに従って戦闘が行われ、勝敗が決まるらしい。ルールとは、撃墜されれば死。

本来は娯楽のはずだった。しかし、夢の島は上層にいくほど本気のプレイヤーが増えると言われている。スーパーロボット／シューティング世界のプレイヤーたちは全員が本物の命を懸けている。ナノマシンが活躍するのは、生産や補修や、人間の食料など。人命救助は無い。

さらには、兵士の中にも後方要員にも女性がたくさんおり、繁殖もある。あの世界で生まれてあの世界で死んでいく人生がたくさんある。

バカだ。今すぐみんな死ねばいい。

視線を下げる。だんだん、意識の中から一人称単数

が消えていく。全て「私達」。一つ一つの肉体は jmgkr と shtkzk と呼び分けられる。

軌道エレベータは三角フラスコと丸底フラスコの中間のような形をしている。対流圏最上層のあたりから太くなり始め、滑らかな曲線を描いて広がり、ジオイド高度三キロで直径二キロになる。その下側は凸レンズ状の底になっている。

ちょうど太くなり始めたあたりから下は、ファンタジイ世界だ。エルフとかドワーフとかドラゴンとか、魔法と王国、戦士と魔法使いと盗賊、そんな領域。さらにその中は三つの階層に分かれている。

広さはないが深い最上層は、ダンジョン世界。パーティーを組んで松明を持ち、薄暗い地下迷宮に潜って宝探しをする。この辺は外国人にも人気があり、公用語は英語で、世界中から集まった同好の士がパーティーのメンバーを募ってダンジョンに挑んだりしている。

その下は日本製RPG世界。ルールが緩く、西欧のものに比べればなんでもありに見えるという。

そしてその下がハイ・ファンタジイ世界。一番広さがあり、世界観と厳密に整合した魔法体系があり、カメラの解像度が

一番高いらしい。私達は上層部には用がないのであまりよく知らない。

同期はほとんど完成している。今や「私達」と「私」の區別を私達はほとんど意識しない。この文を出力する主体も私達だが、形式主観と文体は *3rd person* に準じている。これらを溶け合わせると読者が違和感を感じるためだ。そしてもうひとつ理由があるが、また後で。

同期プロセス自体に苦痛はない。気がつけば私達は私のようになっている。酷いのは分離する時だ。

文字通りの一心同体であった相棒と引き離されるため、体をのこぎりで二つに切断されたような痛みと悲しみ、孤独、喪失感を味わう。開発した科学者いわく、新婚二週間目で死別の悲しみ。

同時に、肉体の制御を奪われ心理の最奥まで覗かれ、暴かれ、侵入されて掻き回されたという感覚が残るため、強姦された直後にそっくりの心理状態に陥る。同じ科学者いわく、十人に一晩中輪姦された後の朝。

この二つの相乗効果は凄まじい。何の手当もしなければ確実に発狂するか自殺するか、発狂して自殺する。そこで医者、カウンセラー、牧師、坊主、様々な麻薬、果ては何でも言うことを聞く美男美女までが用意され、帰還したユニットに至

れり尽くせりの「ケア」を行う。

しかしJingkrは空手を使って暴れるので医者もカウセンセラもさじを投げ、分離の時には枕元でヒロインを焚くようになってしまった。SKKSKは驚異的な精神力を持ち、半日座禪を組むと回復してしまう。

ヘリは進んでいる。今や軌道エレベータ下部がヘリの窓いっぽいに広がり、海は見えない。最も広くなった部分に四層にわたって積み重なるのが、学園世界だ。アクティブなプレーヤーは常に五百万人以上。どこまでもどこまでも続く学園都市の十万以上のクラスで終わらない青春時代が延々と続けられている。

日本の異常に発達した「学園モノ」文化の全てが集められ、物理的に実現されている。SEラノベから少女小説まで、ありとあらゆる冒険と恋愛がある。

望むだけ修学旅行に行ける。いつまでも学園祭が続く。結婚には背徳の秘密とスリルがついてくる。

労働は全て特別な、あなたでなければできないこと。名探偵とか、アイドルとか、スパイとか、戦場帰りとか。

日本人の四分の一以上がこの学園世界に滞在している。素の肉体で素の世界を生きているのは今や特別なことだ。JingkrもSKKSKも本土の街を歩くことができない。若い女性は貴重す

ぎる。神が札幌でできた服を着て歩いていけば、必ず騒ぎが起こる。

ヘリは高度を下げていく。夢の島の真下に海上ステーションが見える。地球上で最大の建造物だ。夢の島との物理的な連結はなく、超電導磁石で緩やかに夢の島を支えている。

海上ステーションから長い長い道路が伸び、空港につながる。夢の島はあまりにも巨大で、周辺の大気が滅茶苦茶になっている。近くに空港を置けないのだ。

巨大なものに目が慣れてしまい、空港は床に落とした割り箸の袋のようだ。

軌道エレベータの底部が視界に入ってくる。あの内部が私達の戦場となる、エロス・ヴァイオレンス世界だ。上層階で何らかの表現規制に引っかかるものは全てこの層に集められる。学園世界のツツパリ達は、血を流す時にこの層に降りてくる。学生カプセルが体育倉庫でセックスする時も、実際にはこの層にいる。

内部は天井の低いフロアと吹き抜けが複雑に組み合わさり、秩序も必然性もなく折れ曲がる街路や廊下が人々を惑わす。雨が降るなら酸性雨で、太陽が顔を出すのは渴いた人々を苦しめるため。

ナノマシンが最も活躍しているはこの階層だ。上の階から

くるプレイヤーに即席で適当な舞台を用意する。ファック用の体育倉庫から、魔女の拷問部屋まで。時には通り全体が江戸時代に模様替える。

そんな階層にも住人がいて、ほぼ全員が何らかの犯罪組織に属す。カタギがないのに犯罪組織が成り立つのは、ナノマシンが色々とお膳立てしているからだ。また、この階層では死んでも特にペナルティ無しで再ログインできる。

今回の工作対象は、この階層にいる。

プ

ツン。

私達はランドリーの前に立っている。背後には入管ゲート。省略が作動したのだ。私達の負担を減らすため、決まりごとを自動で処理してくれる。持ち込み物品確認、撤退要領確認、時計合わせ、座標合わせ。ドアを開けてヘリから降り、入管手続き。意識は遮断されたまま、糸の無い操り人形のように。

糸もなければ意図もない 「とびだすな、前からくるのはまた奪われた 時間を

時間意識への衝撃で、私達は少しか乖離する。システムが介入し、私達は呼吸を合わせる。目の前にある縦長の目のような門が、ランドリーの入り口だ。平たくいえば、ナノマシン更衣室。正式には視覚特性転換装置という。生体免疫ゲートの向こうに沸騰するナノマシンのプールが待っている。入場者は必ずこの装置を通り抜けて夢の島に入る。ここで私達は私達のストーリーにびつたりの姿に調整される。

夢の島では、役割と外見は切り離せない。善人は善人面をしており、逆も然り。主人公は華やかな顔で、モブは地味。学生は学生服、サラリーマンは背広、警官は制服、私服警官は私服という名の制服。厳密な意味での私服は存在しない。全て役割のための制服だ。全裸も。

そして行動も、役割と外見に束縛される。学生は学校に行かなければならない。行かないでいると、周囲の人が行くと促す。それでも行かないと、状況が行かざるを得ないよう仕向けてくる。学校に行かないと水も食料も無い、とか。

もつとも、学校に行きたくないプレイヤーは学生を選ばないので、そんなことはめつたに起こらない。

私達には任務がある。任務遂行に支障がない役割と外見を選ばなくてはならない。様々な装備を持ち込むことができ、

使うことができ、なるべく行動を束縛されないような役柄。

それは、猫耳メイドだ。

《萌えーっ！ 萌え萌えーっ！！ 今をときめく最先端のなう！ ご主人様奥様お嬢様ーっ、紅茶は何を描きましようかアアア？》

脳天に突き抜けるキャピキャピ声で頭蓋を満たし、私達は不意打ちを食らってよろめく。これはskknkknの声だ。これこそがskknkknの特殊能力であり、統合失調症の症状でもある、三人目トロシエム。

同期している以上、個別の意識を持つことは不可能なはずなのだ。しかしskknkknはそれをやってのける。分離の時のダメージも減る。

逆にimgzのダメージは倍増する。好き勝手なことを言われても、同期中であるため言い返せないからだ。形式主観と文体がimgzに準ずるのも三人目のせいだ。skknkknは三人目の言葉を聞くたび混乱してしまうのだ。

しかし、「描く」？ ラテ・アート？ もしかしてケチャップでオムレツになんか描くってあれ？ 聞いただすことはできない。コミュニケーションは取れないのだ。

《ドドデドデドデドデドデドデドデ》

私達を無視して三人目はしゃべり続ける。あるいは歌い続

ける。これはロックンロールの伴奏のつもり。

私達はなんとか二つの肉体の制御を取り戻し、一歩足を踏み出す。ランドリーの入り口に向けて。

なぜ猫耳メイドなのか。「潜入工員」という役柄もある。だがこのエロス・ヴァイオレンス世界においては、女性の潜入工員は必ず失敗する。そして監禁され、陵辱される。必ずだ。例外は無い。

その他の役柄を考えてみると、好きな場所に入り込める職業というのは極めて少ないことがわかる。有力なのは刑事と新聞記者だが、どちらも職業上の制約がある。

そこで猫耳メイドだ。普通のメイドは、お屋敷の中にいる。用がなければ外出できない。基本的には、主人の命に従う。

だが、猫耳メイドは？ どこにいるのか？ 何をすべきか？ 何も規定がない。猫耳は単なる装束のバリエーションではない。主人を持たぬ、奔放不羈ほんぽんふきのシンボルなのだ。それが本質的には使用人のアイコンであるメイドと交わる時、ストーリーの特異点が現れる。

即ち、何処で何をしても良い。

《繩 鞭 ロウソク バイブに浣腸 あなたのためなら……》

私達はランドリーの前に立つ。三人目の声は、耳をふさい

でも消えない。締め出せない。古い古い歌。szkzkzは知っている。メイドさんロックンロール。

ランドリーはなめらかな銀色の目だ。ただし縦になっている。高さは私達の身長三倍ほど。内扉が左右に開くと粘膜色の注入口が現れる。ナノマシン免疫を持つ生体部品だ。どうしても、金属に縁取られた女性器、という連想を振り払うことができない。

注入口が私達を呑み込むべく伸びてくる。今度は飛びだした肛門に見える。jngkrもszkzkzも、首を傾けてだらしなく口を開き、唇の端からよだれを垂らしている。体は前後に揺れ、左右の瞳は別々の方を向き、かくかくと揺れ動く。ストレスだ。どうして、どうして、こんな事、しているの……

《魔女つ子変身モードつ、らみばすらみばかりするるるる、むうううウウウンプリズムなんとか、臨、兵、闖、者、皆、陣、烈、在、カッポレ!!!》
呑み込まれる。

プツ

ツン

トイレの個室。jngkrの見当識。szkzkzも同じ。だが互いの肉体は同じ個室内には無い。私達は扉を開ける。ヴァイオリンの悲鳴のような軋み。床は細かい正方形のタイル。それほど汚れてはいない。

二歩踏み出す。後ろを向いて扉を閉める。ヴァイオリンの嘆息のような軋み。そこで私達は、私達を見出す。隣にいる。座標再同期、完了。

私達は見つめ合う。

jngkrは、綺麗だ。長い睫毛、吸い込まれるような黒い瞳、すつきりと通った鼻筋、小さくて薄いのに、肉感的な唇。長い真つ直ぐな髪を、後ろでゆるくまとめている。そして頭の上に、本物の猫耳。

szkzkzは、かわいい。遠くを見るようなあどけない瞳、低くて控えめな鼻、ふつくらとふくらんだほっぺ。明るいブラウンのセミロングは、どうしても真つ直ぐにならないウェーブがかかっている。そして頭の上に、本物の猫耳。

膝丈の、パニエの入ったスカート。フリルをあしらったエプロン。白い清潔なカフスカバー。背中 of 大きな蝶結び。完璧な、綺麗でかわいい、メイドさん。

システムが隠微に介入する。

同期が深い。互いの自己愛領域まで共有が始まっている。

戦場に降り立ち、二人の集中力が高まったせいだ。これ以上同期が深くなると、外界への関心が閾値を下回り、任務遂行に支障をきたす。

行動開始だ。周囲の状況に気を配り、進む。それだけで同期は正常なレベルに戻る。

前衛は jngkr。szkzk はバックアップ。ビジュアルソナーをオン。近くで動いているものを探知できる装置だ。反応は私達のもののみ。

jngkr は洗面台の前を通り、ドアをそっと開ける。と、外だ。上空に偽物の空。

この段階では、まだそれほど警戒しなくてもいい。エントリー直後の環境は中立、というのが夢の島の共通したお約束だ。昔の RDR が「村の中」から始まるように。

舞台は都市のスラム。目の前には雨に侵食されたコンクリートの壁。足元はびびり割れたアスファルト。jngkr のピカピカの革靴が一步踏み出す。ルートは左。十メートルほど先で、T字路に突き当たっている。次は右。

私達は小走りに路地を進む。曲がっても曲がっても景色が変わらない。六つ目の角を曲がるとやっと、少し広い道に出た。左手を見ると道は緩やかにカーブして視界から消える。すっきり錆びついた看板がビルの壁面から突き出ている。右

手を見ると Y 字路になっている。

私達は左に向かう。看板の下に、ガラスの割られたショーウィンドウと、自動ドアの残骸がある。入り口だ。事前情報のとおり。

ここから先は警戒しなくてはならない。ドアをくぐるごとに環境は敵性に傾く。これも夢の島のお約束であり、古い古いゲームから来ているという。

私達は少しためらう。銃を構えて進むべきか。否。警戒は危険を呼び寄せることがある。脳みそが二つあると結論が早い。

jngkr はそっと壊れた自動ドアをまたぎ、建物内に足を踏み入れる。床に散らばったガラスが音を立てる。そのままフロアの中央までゆっくりと進み出る。

一階の半分以上が受付ロビーに充てられていた、わりと広いオフィスビルだ。

その場に立ったまま、周囲を警戒しながら、待つ。しかしソナーに反応は無い。szkzk もフロアに足を踏み入れる。

工作対象はこのビルの十五階付近にいるという。建物内の地図はない。階段を探さねばならない。私達は二つの頭で周囲を見渡し、とりあえずエレベーターホールの奥に進むことにした。

jngkr が先に歩き出す。こちらの体は四の役目も負っている。空手を極め、瞬間的な防御と反撃が極めて強力なのだ。szkzk は五歩ほど遅れてついていく。ソナーには未だ反応なし。

左右に三基つつ、あわせて六基のエレベーター。右の真ん中のものは扉が開いている。しかし箱は無く、暗闇の穴となっている。jngkr はそちらを見ない。真つ直ぐ前を向いたまま、一定の歩調で進む。

エレベーターホールの突き当りはT字路。角を曲がる時には気を使う。映画なんかでは壁にぴったりと着くが、あれは敵も味方も銃を持っているからだ。jngkr は銃を構えておらず、敵はどんなものか想定できない。jngkr は通路の真ん中をまっすぐ進み、T字路の中心まで進んで立ち止まる。szkzk は壁に寄る。

ここでも、ソナーに反応なし。jngkr は左右を確認する。左手には閉じた防火扉、右手には喫茶店らしき店舗の廃墟。防火扉が当たりだ。その先に階段があるはず。

防火扉に向かって進み始めるとすぐ、ソナーに反応があった。

《飛行機雲でピカッ》

三人目が言ったが、私達には意味がわからない。jngkr は

知識を持ち合わせないし、szkzk は知っていてもややこしくて今は説明できない。

反応は生体、ヒト型、一体。私達は歩調を変えず歩き続ける。近づくほどに情報は詳しくなる。

武装なし。ビジュアルソナーの画像を見て、私達はそう判断する。ただし、機械、道具の類に限る。素手で自動車を吹き飛ばす程の使い手かもしれないし、手から怪しげな光弾を放つかもされない。どんな予断もできない。

味方とは考えにくい。ならば、敵だ。私達は歩きながら考える。敵は動かない。立っている場所も、ごく無防備だ。そして、一階の敵は弱い。これもこのルール。

交戦する。

szkzk が歩調を早め、jngkr を追い抜く。防火扉の通用口について、開ける態勢。jngkr はそのまま歩いてゆく。タイミングを合わせ、通用口が開かれる。jngkr はひよいとお辞儀をするようにくぐり、敵を見る。

それは震え渦巻いて、その形になった。大腸、でできた脳味噌、をスライスして上半分を、床に。そして大きい。うづくまる牛のような。

第一印象から遅れて、細部の質感が来る。卵白と痰を泡立て器で混ぜたような粘液に全体が濡れている。表面は死んで

腐りかけたような粘膜に覆われ、酸に焼かれたような爛れと皮膚病のような腫れ物が散らされている。

同じに空気に触れているだけで穢されるような。体の深いところから痒くなってくるような。凄まじい気色の悪さ。

次に鼻に来る。生ゴミの匂いと、切り裂かれたばかりの腹から立ち上る臓物の匂いと、死んだ魚介類の匂いと、刈り取った草の匂いが少し、混じり合っている。一呼吸するだけで、血液から内蔵まで染まってしまうような強烈な匂い。

これはナノマシンによる擬態だ。私達が猫耳メイドになったように、こいつはこんなものになったのだ。こういう構造まで変えるような変身は、他のプレーヤーの視野に入った時だけ行われる。だからソナーにはヒト型が映った。

そして今も、ナノマシンはアクティブだ。私達の装束はナノマシンで作られたが、今はナノマシンを含んでいない。ただのコットンだ。猫耳との接合部だけがアクティブ。しかしこいつは、今も全身が活動するナノマシンに包まれている。

ナノマシンに遠隔操作は一切効かない。通信によってハックすることはできない。構造上、そういう機能を持たないように制限がかけられている。よって、何かが接触しなければダメージもコミュニケーションもない。

私達は酷い吐き気を覚える。

ゆっくりと、そいつの脳味噌の谷間から、何かがせり出してくる。ちょうど人の頭くらの大きさ。数えたくないが、五十個近くの肉塊。

そして、肉塊の天辺に開いた穴から、紐状のものが滑り出てくる。疣、贅、瘤、穴、筋、毛、吸盤、鱗、絨毛、触角、およそ生物の表面にあるありとあらゆる形状が滅茶苦茶に貼り付けられた、粘膜の紐が。五十本近く。

視界に入ってくるだけで、意識が混濁しそうになる。

これは触手だ。日本のオタクたちはこういったモノが女の子に絡み付いて犯すセックス・ファンタジーを延々と受け継ぎ、発展させてきたのだ。

しかしこの無策な登場の仕方から言って、こいつは「良い」触手だと思われる。和姦が望みなのだ。そうでなければ待ち伏せたり、騙し討ちにしたりする。特に、カタカナでしゃべるような奴は。

《ぬるにゆるむにゆるぬるにゆるる僕は良い触手だよおねえさん遊んでくう？経験者さんはおまた疼くう？》

三人目が唐突に割りこむ。今度でJiggyの肉体は使い物にならなくなるかもしれない。こんなストレスは経験したことがないはずだ。

そう、Jiggyは以前「悪い」触手に犯されている。そして

分かったのだが、こいつらは基本的に、女体の扱いを心得ているのだった。ログイン前に講習会が開かれ、触手肉体の扱いを学ぶ。触手は見た目よりずっと力が強いいため、首を絞めると簡単に人が死んでしまう。

それでは話にならないため、正しい拘束の仕方から始めて、リアルな触手エロのための知識をひと通り学ばらしい。

Jigoku は怒り狂っている。しかしその怒りは瞬間冷凍されて意識の奥底に沈められる。そして分離の時に一気に解凍されるのだ。ただ、口元だけは、怒りの形に硬直している。

しかし、「私達」は同情も禁じ得ない。

こんな生き物に自分から進んで身を任せるような女は十万人に一人もいないだろう。そんな運命の女性に出会うまで、こいつは只々無防備に殺されては再びログインすることを繰り返す。業に死ねればいいが、この階層は変態に事欠かない。いちいち悲惨な殺され方をするはずだ。

健気だ、とも思う。

三人目の発言も含めて三秒ほど逡巡したが、結論は決まっている。ここで足止めを食らっていたら任務の遂行に支障をきたす。

Jigoku の右手が稲妻の速さで背中に回る。蝶結びの下に隠した拳銃を抜く。

Jigoku 「気持ち悪〜！」

Sakka 「御免！」

発砲。三発。そして走る。触手脳味噌の脇を駆け抜ける。一発目の命中と同時に、伸びた触手は怯えたように引っ込んでいた。そのまま階段を駆け上がる。Sakka が追い抜いて踊り場をクリア、Jigoku は振り向いてもう二発。

ダメージははつきりしないが、追っては来ないだろう。足があるかどうかも怪しい。Jigoku は拳銃をしまい、私達は隊列を組み直す。

《死後、裁きにあう》

三人目の棒読みが頭の中に響く。私達は階段を登る。

Bパートは灰メガ02にて！ 乞うご期待